

6 . おわりに

言うまでもなく設計基準は設計者にとって非常に重要な意味を持っています。ある時は基準は設計者の意志決定の拠り所であり、ある時は足かせとなります。その設計基準が仕様を重視した仕様規定から、構造物の本来必要とされる性能を重視し、それを要求する基準に代わるといふ話は、設計者にとって不安と期待を同時に抱かせる大きな変革と言えるでしょう。

この性能設計に関する第一期の委員会が始まった1998年当初、日本の社会全体に閉塞感があり（現在でも継続していますが）、規制緩和を行い日本の産業・経済を活性化させようという機運が高まりました。その流れは現在の小泉改革に引き継がれています。私自身が性能設計に関わるいくつかの委員会に参加したのも、このような活動を通して少しでも社会に貢献出来ればという思いがありました。

小泉内閣による改革がなかなか進まないように、鋼橋の分野での性能設計への変革もなかなか進まない状況があります。この理由として、性能設計は理念としてはすばらしいが実現は難しいとか、技術のレベルが性能を的確に評価出来るまでに達していないとか、社会システムが性能設計に対応していないなど、様々な問題が指摘されています。これらの指摘の多くは正しいものと思われます。

しかし、今までの設計方法・発注方法を保持したまま現在のレベル以上にコスト縮減を行うことは殆ど限界であり、某かの抜本的な変革が必要といった認識も多くの方々に賛同いただけるものと思います。その改革があるいは性能設計ではなく、例えば「設計VE」等の別の形になるのかもしれませんが。また、橋の機能を考える際に、本報告書の「橋のカタログ」が参考になるでしょうし、「試設計」においては設計法の変更による効果が具体的に検討されています。もちろん情報収集WGの成果は他の参考文献を探す上で手助けとなります。このように、本報告書が鋼橋の設計・発注体系の今後の変革に役立てば幸いです。

最後になりましたが、常に的確な活動方針を指示していただいた杉山委員長、ならびに多忙な業務を抱えつつ非常に精力的に委員会活動を行っていただいた委員各位に感謝いたします。

2002年6月
奥井義昭